

世界史

古代ローマの人々の生活

なぜこれほどまでの高度な文明社会が減んだのか？

「大衆的人間の役割はこわすことである。彼らは文明の寄生虫であり、文明がけっして滅びないと確信しているからこそ、文明を否定して生きている。この子供のような群衆は、ヨーロッパ文明の老朽化を宣言したものの、みずから新たな体系を創造する能力がないために、なにをしてよいかわからず、上位の権威を認めずただ反抗し、とんぼ返りをして時間をつぶしている」

オルテガ 『大衆の反逆』(1930年)

享樂のローマ

「現在の上流社会では不妊症の妻を持つのが一番いい、遺産めあてに皆が親切にしてくれる。子供を生むような女房を持ったら最後、黒ん坊の子を産まないと誰が保証できようか」ユヴェナリスのこの言葉は、多少誇張の嫌いはあっても、時代の病弊をずばりと言いあてている。かつての禁欲的な時代にも、後のキリスト教時代にも、結婚は神聖だったが、この享樂の時代には、一時的な冒険に過ぎない。子供の養育はかつては国家と神々への義務であり、後生を葬ってくれる子孫なしではあの世の幸を得られぬものと信じられていたが、今や面倒な仕事にすぎず、子供はじゃま扱いされ、妊娠中絶が流行し、中絶しそこねて生まれてしまうと、「乳の出る円柱(コルメン・ラクテウス)」の下に捨てればよい。そこには国費で雇われた乳母がいて、捨て子の保育に当たることになっている。

ローマの母親は、子供が生まれるとすぐに乳母にあずけて保育させ、ついでギリシア人の女教師に子守をたのみ、最後にこれもたいていギリシア人の家庭教師に教育を委ね、自分は何一つ子供の面倒は見ない。家庭教師を雇わない場合は、当時各地に設立されていた学校に通わせる。学校は全部私立で、12、3歳までは男女共学の小学校に通う。これを卒業すると、女子は音楽と舞踊を主要科目とする女学校で教育を終える。男子は中学校へ進み、ギリシア人の教師につき、ギリシア語、ギリシア文学、ギリシア哲学の3科目が特に重視される。

大学は制度的なものではなく、試験も卒業論文も卒業証書もない。講義を聞き、討議をするだけで、謝礼は年2千セルティウス、つまり約15万円程度だったが、実生活に無用な抽象論しか教えてくれないと、ペトロニウスは文句を言っている。

人々は肥満体になった。禁欲時代のローマの肖像はやせぎすで骨張っているのに、この時代のものは例外なく閑暇と栄養が満ち足りて、まるまるでぶでぶと肥っている。ひげづらは消え、床屋が至る所にできた。初めてひげを剃る日はお祭りのように祝われる。髪はだいたい丸坊主に刈ったが、長く伸ばしふさふさ波打たせて粋がる男もいる。紫のトーガは皇帝専用となり、臣民は白い単衣を羽織り、カプリ風のサンダルをはいた。

良家の奥方は、朝の化粧に使う時間が3時間を下らず、それに使う奴隷も6人を下らない。浴室はかみそり、ハサミ、大小のブラシ、クリーム、おしろい、ポマード、油、石鹼でいっぱいである。ポップアエは顔の老化を防ぐためパックを発明、流行させた。牛乳風呂が毎日のこととなり、旅行に出る時は乳牛の一群を引きつれる。美容食、美容体操、日光浴、マッサージなどを教える専門家があり、新しい奇抜な髪型を工夫して評判をとる美容師もいた。

冬は毛皮の襟巻を用いたが、これは北方の属州、特にガリアとゲルマニアに赴任した夫や愛人の贈り物である。宝石は貴婦人たちの情熱をかき立て、四季を問わず豪華に身を飾った。ロリア・パウリーナ夫人は、約20億円の宝石を身体中に飾って外出し、その種類も百を下らなかった。ある元老院議員は1億5千万円もするオパールオパールの指輪をはめていたので、ヴェスパシアヌス帝に追放された。まじめなティトゥス帝はこのような富の誇示を禁じようとしたが、奢侈品産業を抑圧するとローマ経済は大混乱しそうだったので諦めた。

この時代の中流階級は、正午まで働き、軽い昼食をとり、それからまた働く。だが仕事が終わると、公衆浴場へ行く。この頃のローマ人ほど清潔な民族は古今東西類を見ぬだろう。大邸宅には私設の浴場とプールがあったが、公衆浴場も市内に千軒以上あり、一般市民の使用に負かされていた。収容人員は平均千人、大浴場兼娯楽センターだった。夜明けに開場、午後1時まで女性専用、午後2時から日没まで男性専用だったが、しだいに混浴になっていった。入場料は10円くらい、まず脱衣場で服を脱ぎ、闘技場へ行って拳闘、槍投げ、バスケットボール、跳躍、円盤投げの練習の後、マッサージ・ルームであんまをさせ、最後に文字通りの入浴となる。まずテピダリウムといって生温かい空気に当たり、ついでカリダリウム、すなわち熱い空気にあたり、それからラコニウム、つまり熱湯の蒸気に当たる。この段階でガリア産の新製品、石鹸が使われる。最後に、血液の循環をよくするため、氷のように冷たいプールに飛び込んで泳ぐ。

入浴が済むと身体を拭き、油を塗り込み、服を着替える。彼は遊戯室でチェスやサイコロを楽しむのもいいし、談話室の常連と話に興ずるのもいい。食堂ではうまい料理に舌鼓を打つのもまた楽しいではないか。不景気な時でも6種類は料理が出るし、うち2皿は豚肉料理だ。残った時間はトリクリニウムという寝椅子に身を委ねよう。これには両側に台がついていて、左の台にき枕が、右の台には料理や酒をおくようになっている。料理は獣脂のソースをたっぷりかけた油濃いものだが、ローマ人は胃袋が丈夫で、しょっちゅう大宴会を催して飽きることなく健啖ぶりを発揮した。

宴は午後4時に始まり、早くとも深夜までには終わらない。テーブルに花が飾られ、芳香が漂い、上等の制服に身を固めた給仕の数は、最小限招待客の倍である。料理は山海の珍味、伊勢海老は珍重され、1匹6万円もした。ヴァエディウス・ポリオは初めて海老の養殖を試み、アピキウスはパテ・ドゥ・フォア・グラを発明して名をなした。このアピキウスは奇人で、食道楽で財産を蕩尽したが、まだ10億円ばかり残っているのに、貧乏はいやだと言って自殺してしまった。

主人は客たちに珍しい品物を贈り、給仕たちは食卓をめぐるって嘔吐薬を配る。これを飲んで吐いてしまうと、また食べ始める。げっぷは作法に反せず、むしろ料理に堪能したことを示す礼儀の一種だった。

引用文献 【中公文庫『ローマの歴史』 I・モンタネッリ著】

※実際のプリントには空きスペースに、絵図、写真、地図が入ります